

ー 私の文学館散歩（七） ー

# 佐久・小諸から白金・高輪へ

松村 茂治

## 佐久・藤村旧宅

信州・佐久にある藤村旧宅に行ってきたなどと書くとは、  
 「それはどこのフジムラさんですか？」と言われてそうな気がする。藤村と言えば「小諸なる古城のほとり・・・」であり、それは彼が小諸義塾の教員をしていた頃に詠まれた詩だから、旧宅があるとすれば、佐久ではなく小諸ではないのかというのには当然のことである。しかし、私たちは佐久盆地の外れ、そこから蓼科高原に向けて道が勾配を増して行こうという山裾に立つ寺の一面で、島崎藤村のかつての住まいに触れて来たのである。

なぜ佐久に藤村旧宅を見つけ、そこまで行くことになっ

たのかを説明すると、いささか長い話になる。つまり、それは「銀河連邦共和国」にまつわる話ということになるのだが、ウルトラマンや宇宙戦艦が出てくる話ではない。

三年ほど前、私たちの住む相模原市の市報を見ていた妻が、そこに林檎の木オーナー募集の広告を見つけたのである。オーナーと言っても、林檎に投資をしてひと儲けしようというのではない。春先に幾許かの契約料を払って林檎の木をオーナーになると、秋に、その木に実った実をすべて自分のものに出るというだけのことである。町の八百屋で買うより安いのかというと、摘みや摘果、葉摘み等で何度も現地まで足を運ばなければならず、その手間や交通

費を考えると、安くとも銀座の高級果物店の林檎より安くはないだろう。とても一儲けどころの騒ぎではないのだが・・・まあ、これは散歩とは別の話である。

なぜ市報に、佐久の果樹園が出ていたのかは、以下の事情による。

私たちの住んでいる相模原市には、「はやぶさ・はやぶさ2」でお馴染みのJAXA宇宙科学研究所があり、佐久市には、その観測基地が置かれていることから、両市は宇宙開発を仲立ちに友好都市の関係にあるというのである。佐久市のHPには、この友好都市について、以下のように説明されている。

「相模原市の提唱により、昭和六十二年十一月八日、文部科学省宇宙科学研究所の研究及び観測施設のある二市三町（現在は四市一町）で銀河連邦共和国を建国。ユーモアとパロディにより、連邦国家を組織し、共和国相互の理解と親善を深めることにより、宇宙平和の一翼を担うとともに、人々の笑顔にあふれたユートピアの創造をめざし、首脳サミット、銀河フォーラム、子ども留学交流、物産販売等経済交流により友好を深めております。さらに、平成二十八年四月一日に角田宇宙センターが所在する宮城県角田市が新たに銀河連邦に加盟し、七共和国（五市二町）となりました。」

「宇宙平和の一翼を担う」とはなかなか雄大な構想だが、妻が市報で目にしたのは、その中ではややスケールの小さい「物産販売等経済交流」の一環としてのオーナー募集ではなかったかと思われる。ただし、妻が実際に契約したのは、銀河連邦管轄の果樹園ではなく、佐久市の果実生産組合直属の果樹園であった。このことは明確にしておかなければならない。そうでないと話の辻褄が合わなくなるからである。

銀河連邦果樹園にできなかったのは、そこだとオーナーが抽選で決められる可能性があること知ったからである。妻には、オーナーになるのは、孫たちに林檎体験をさせるためという思いがあったので、くじ引きは受け入れ難かったのである。

契約後しばらくして送られてきた数枚の書類の中に、車の来園者のために用意された果樹園周辺の地図が入っていた。契約果樹園は、佐久盆地を見下ろす小高い丘陵地にあるらしく、そこへの登り口にある寺（貞祥寺）のすぐ脇に「島崎藤村旧宅」とあるのが目に留まったのである。もちろん私だって、藤村と言えば小諸のはずだが・・・と知らないでもなかったが、「千曲川旅情の歌」には、「うたかなし佐久の草笛・・・」とあるので、この地に旧宅があってもおかしくはないのかもしれない・・・と勝手に合

点をし、特にその正否について確かめることはなかった。正否はともかく、銀河連邦果樹園は、私たちが契約したのとは全く別の所にあるようなので、そちらに行くことになったら、藤村旧宅には巡り会えなかったということだけは確かなことである。

### 旧宅訪問

三年もの間、思い込みを修正できないでいたのは、毎年藤村旧宅のすぐ脇を通りながら、そこを訪れることがなかったである。

オーナーになると、秋の収穫だけでなく、春の摘花、夏の摘果、秋の葉摘み等、何度か通うことになることは先に述べた通りである。高速道路が整備されてきたおかげで、渋滞さえなければ、我が家から三時間ほどで行けるので、これらの行事には日帰りでの参加を常としてきたが、ひとたび渋滞となるといつ帰り着けるか分からないので、作業を終えればそそくさと立ち去るようにしてきたのである。

三年目は新型コロナウイルス禍による外出自粛のあおりをうけ、摘花や摘果行事は省かれ、晩秋の収穫のみの体験となった。考えようによっては、まさに美味しいところだけを手に入れることになるので、良かったのではないかと言われそうだが、何かやり残したような、一種の不完全燃焼とでもい

うような感覚を覚えたのである。そこで、収穫のときだけでも「信州体験」をしようと、近くに宿をとつての参加を計画したのである。家路を急がなくても良くなったので、旧宅訪問が可能になった訳だが、ここに寄つたからといって、大して時間のロスにはならないことが、実際に行つて見て分かった。

旧宅は、果樹園への登り口の目印になっている貞祥寺の駐車場から、歩いて二、三分の所にあつた・・・というより、貞祥寺の敷地の中にあつたと言うのが正確な言い方だろう。寺の駐車場に車を止め、表通りに出るとすぐ目と鼻の先に、大人の身の丈よりも高い二本の石柱が見えていた。そこが寺への入り口らしかったが、ここから寺へ入る人がいるのだろうかと思わせるような、うらさびしい、荒れ果てた感じの参道だった。

石柱の間を通り抜けて十ほど緩い坂を進むと道は鍵の手に曲がり、その先に古い苔むした急な石段が現れてくる。道幅は広く、使われている石材も立派で、かつてはこの石段が寺の正面入り口だったのだろうと思つた。いや、今でも、ここが正式な入り口なのではないか。しかしながら、車社会となった今では、参拝者はもちろん、寺の関係者も車を使つてのお勤めが当たり前になり、こちらは顧みられなくなつたのだろう。かつては立派だった石段も、摩耗・

風化が目立ち、所々に見られる崩れがそのまま放置されている。そのお陰でと言つたらいいのだろう、林に囲まれ、すつかり苔むした石段は、時代を感じさせるいい風景になつていた。

間もなく石段を登り切ろうという所で、すぐ前を歩く妻に「たそがれ清兵衛でも出てきそうだなあ・・・」と言葉をかけたのは、もちろん侍が出て来て来ても不思議ではないような感じがしたからだだが、それを清兵衛としたのは、果樹園から送られてきた地域の観光案内に、山田洋次監督による「たそがれ清兵衛」のオープンセットが、ここから車で三、四十分行つた中山道沿いの宿場に作られているとあるのを読んでいたからかもしれない。山田洋次は、「たそがれ清兵衛」の他に「隠し剣・鬼の爪」と「武士の一分」の計三作の藤沢作品を映画化しており、そのどれかでこんな苔むした寺での決闘シーンを撮つたのではなかったか。

昔、「たそがれ清兵衛」を見たとき、原作はこんなストーリーだったろうかと、多少の違和感を覚え、帰ってから読み返して、新潮文庫の同名の短編集にある「祝い人八助」（ほいとやすけ）が、映画の主たる原作だったことを知つたのだった。山田洋次は、いくつかの藤沢作品を組み合わせ、映画「たそがれ清兵衛」を作つたようだ。

オープンセットは、真田広之演じる清兵衛が、その剣術の腕前を見込まれ、家老から命じられた決闘に赴く際に後にしたあの家であり、宮沢りえ演じる幼なじみが、勤めを無事果たした清兵衛が帰つて来るのを待つていたあの家である。

清兵衛は貧しい下級武士という設定だから、城下の街中に住むことはないとしても、街外れという言葉も当てはまらないような辺鄙な山里にその住居が設定されていたのは意外だったが、山中のボツンと一軒屋のようなたたずまいだったのは、映画がこんな山中で撮られていたからだったのだ。せつかくだから、このオープンセットにも寄つてみようかと思つたのだが・・・いやいや、清兵衛宅ではなく、私たちは藤村旧宅に行くのであつた。

清兵衛が出てきそうだと口にしたとき、私たちは、木の雨戸を閉め切つた青いトタン葺きの平屋の家屋の前に来ていた。それが、藤村旧宅だった。元々、旧宅は茅葺きだった。その上にトタンを被せて屋根を保護しているようだった。建物前に立てられた案内板に、こんな説明書きがあつた。

島崎藤村（小諸時代）旧栖の家

島崎藤村（明治五年〜昭和十八年）は、明治三十二年

四月小諸義塾教師として信州小諸へ赴任（中略）、明治三十八年四月小諸義塾教師を辞するまでの六年間この家で過ごした。この間、島崎藤村は、「落葉集」「藤村詩集」を刊行するかたわら、散文集「千曲川のスケッチ」名作「破戒」などの稿を起して詩から散文への移行を志した。島崎藤村をして、詩人から小説家へ転生させたのは小諸時代の生活で、藤村文学にとって最も重要な時代といえよう。この家は大正九年その消失を惜しむ本間隆氏によってひとたびは佐久市大字前山に移転されが、以上の文学的意義に鑑み、藤村誕生一〇〇年につづく没後三十年を記念して昭和四十九年一月十日から総工費七〇〇万円をもって重ねて当初に解体復元工事に着手し、同四九年六月三十日完成した。（後略）

改めて、藤村はここには住んでいなかったということを知ることになったが、移築の立役者、本間隆氏がどのような人物なのか、七〇〇万円という金額が現在ではどれくらいになるのか、いやいやそんなことよりも、なぜこの建物を小諸に置いておくことが出来なかったのか・・・と、いろいろと気になることがある。

玄関と思しき出入り口も板戸で閉じられ、そこに貼られた小さな紙に、この年の開館は終了した旨の断り書きが記

舞台が、軽井沢だったということは何かで読んだ覚えがあるが、それが宿から歩いて行ける所にあるというのは意外だった。

なんとかテラスという、何度聞いてもその名を覚えられない、私としてはバタ臭いといかないが、こうしないと若い人は来ないのだろうというような、今風の商店街（こういうのをリゾートと言うのかもしれない）の先、湯川沿いの林の中に、目指す詩碑はあった・・・確かに詩碑はあったのだが、近づいてそこに彫られた文章を読もうという人は誰もいなかった。「落葉松」の詩は、この近くの林で詠んだとのことだが、木々はすっかり葉を落としていて、どれがその落葉松なのか分からなかった。今、これを書きながらガイドブックを開いて見たのだが、詩碑も、落葉松林の案内も出ていない。最早、白秋で人を呼べる時代ではなくなったということなのだろう。

詩碑にあった、白秋自身が書いたという説明を読んで、長い間の思い違いを指摘された気がした。こんな風に書かれているのである。

落葉松の幽かなる、その風のこまかにさびしく物あはれなる、ただ、心より心へと傳ふべし。また知らむ、その風はそのささやきは、また我が心の心のささやきなる

されていた。私たちが、「今年の開館は終わってしまったようだ」「じゃあ、来年も林檎をやらなければ・・・」などと話をしていると、寺の本堂の方からやって来たと思われる二人連れが、私たちと同様、案内板や断り書きを読んだ立ち去って行った。

建物の脇を通り抜け、反対側へ出ると、そこも雨戸で塞がれ中をうかがうことは出来なかったが、こちらが陽の当たたる南側で、居室になっていたのだろうと想像した。

しばらく家の周囲をうろろしてから、元来た道に戻ろうとすると、先ほどとは別の二人連れがやって来て、苔むした石段にカメラを向け盛んにシャッターを切っていた。

木の間から漏れる西に傾きつつある陽の光、青苔に覆われた古い石段・・・どんな写真に仕上がるのだろうと思いつながら、旧宅を後にした。

#### 軽井沢・タリアセン

藤村旧宅を後にして向かったのは軽井沢である。この日の宿を軽井沢に決めた一つの理由は、ここに来れば、堀辰雄、有島武郎、室生犀星・・・と、いくらでも文学館散歩ができるだろうと、安易な考えを持ったからである。

宿泊していた宿でもらった付近の散策地図に、白秋の「落葉松」の歌碑とあるのが目に留まった。「落葉松」の

を、讀者よ、これらは聲に出して歌ふべききはのものにあらず、ただ韻を韻とし、句を句とせよ。

「落葉松」にはじめて接したのは、中学三年生のときだった。なぜはつきり覚えているかという点、この詩は、高校受験が近づいた頃、市内の書店で買いたった国語の受験参考書に取り上げられていたからである。子どもながらも、「からまつの・・・からまつの・・・」という乾いた音の繰り返しが印象に残った。その繰り返しに軽快なリズムを感じるとともに、次々と落葉松林が現れてくる高原の情景を思い描いたものである。以来ずっと、この詩は声に出して歌うものと思っていたが、作者自身がそうではないというのである。言葉ではなく心を読めということなのだろうが、聞いてみなければ分からない。

この日、「落葉松」の詩碑の文を読んだあと、信越線の線路を越えて、南軽井沢方面に行くことにした。目当ての一つは高原文庫であるが、文庫以上に、どうしても見ておきたい建物があった。

それは、「軽井沢タリアセン」にあるらしいのだが、「軽井沢」はともかく、「タリアセン」とはどういう施設で、そもそも「タリアセン」とは何語で、どういう意味な

のか全く分からない。関係者にとっては自明のことなのだろうが、知らない者にとっては突き放されているような感じがしないでもない。年寄りの僻み根性と言われれば、否定はしないが、最近、人名、歌や映画の題名、施設の名称など、この種のことをがずいぶん多いような気がする。もつとも、名前は記号の一つにすぎないのだから、タリアセンでもタリアセンで良いのではないかと言われれば、引き下がるしかない。地図を見る限り、軽井沢タリアセンは、公園のような施設に見えるのだが・・・

そのタリアセンの中にある塩沢湖のほとりに建つ「睡鳩荘」が、ウイリアム・ヴォーリズの設計によるものだというのを知ったのは、今回の宿泊地をどこにしようか、迷っているときだった。果樹園のある佐久の近くなら移動に時間はかからない、八ヶ岳山麓なら高原のドライブを楽しむことができる、小諸、軽井沢なら文学館散歩が・・・と地図やガイドブックを眺めているときに、ヴォーリズの名前が目に入って来たのである。

軽井沢は、外国人によって再発見されたような所なので、ここに外国人の建築家の手になる建物があっても不思議ではないが、ヴォーリズとなると、改めてなぜ彼がここに・・・と迷ってしまうのである。ヴォーリズについては、後で触れることになるが、睡鳩荘が仏文学者・朝吹登水子に

階の各部屋の木製の格子窓は、上部に曲線を取り入れたアール・デコ様式となっている。改めて持ち出すまでもないが、アルミサッシの窓では感じられない落ち着いた雰囲気が出て来るのである。

ここに来てヴォーリズ設計の建物の中を見ることができたのは思いがけない体験だったが、入り口に掲げられていた、登水子自身の書いた「睡鳩荘に住んで」という短い文章の中に気になる一言があった。

父（実業家、朝吹常吉）は、（中略）ヴォーリズ氏に高輪の洋館を依頼した。この洋館は現在も高輪東芝倶楽部として残っているが、この洋館は一九二六年に建てられた思い出多い処である。

高輪にあるヴォーリズ設計の建築と言えは明治学院大学のチャペルを思い浮かべるが、その目と鼻の先に、ヴォーリズの洋館があったとは・・・

### 小諸・懐古園、藤村記念館

睡鳩荘を見たあと、道路を隔てた向かい側にある軽井沢高原文庫に寄ったのは、ここに来れば、この「文学館散歩」のネタが得られるのではないかと考えてのことだった

縁の建物と知って、ますます見ておきたいと思うようになった。

朝吹登水子は、私の学生時代、つまり半世紀以上も前に活躍していた人で、当時のフランスの文化や文芸の多く、取り分けフランソワーズ・サガンの作品は、彼女を介してわが国に入ってきたものではなかったか。私は仏文を専攻していた訳ではないし、特にサガンを愛読したというわけでもないが、「朝吹」と聞くと一種の郷愁のような感じを覚えるのである。

睡鳩荘は、昭和初期、登水子の父親・実業家の朝吹常吉がヴォーリズに設計を依頼し、旧軽井沢に朝吹家の別荘として建てたもので、登水子の死後、二〇〇八年に塩沢湖畔に移築・復元されたということである。

別荘ということもあつて、切妻型の屋根、丸太を半分に分けて張り付けたような簡素な造りの外壁、一階にはいつでも大勢の人が集まれるように広い居間が用意されている。その居間は、テラスに面して天井までがガラス戸になっているので、採光を考えてのことだろうと思つたが、私たちが行ったときには、カーテンが下ろされていて、明るさを感じなかった。気に入ったのは、居間の天井である。数本の梁がむき出しになって、天井の漆喰といひコントラストをなしていた。寝室や書斎として使われていたであろう二

が、それはあまりにも安易な考えだったと言わねばならぬ。軽井沢に縁のある作家のあまりの多さに、彼等だけで立派な日本文学全集が組めるのではないかと思つたほどである。少なくともここで「散歩」のための資料を集めるには、少し準備を整えてからでないかと話にならないと考え、他に回ることにしたのである。他が、なぜ小諸になったのか、よく覚えていないのだが、睡鳩荘にあつた朝吹登水子の「高輪の洋館」の言葉に触発されたからではないかと思う。

高輪の旧朝吹邸まで行くことになれば、近くにはある明治学院にも寄ることになるだろう。明治学院となれば、藤村・・・せっかく藤村旧宅を見て来た訳だし・・・こんな連想が働いたのではなからうか。

晩秋の、やや風の強い日だった。小諸へ向かう車の右手に、青空を背景に浅間山がずっしりとした姿を見せていた。この朝見て来た、「落葉松」のなかの「浅間嶺にけぶり立つ見つ・・・」の一節を思い出したけれど、風向き関係からか、噴煙は見えなかった。

懐古園に来たのは、およそ四十年ぶりのことだった。入館時にもらった案内には、藤村記念館は昭和三十三年竣工とあるので、この前来たときにも寄つたはずだが、よく覚

えていない。思い出したことの一つは、以前来た時には、記念館のすぐ近くの広場に、「草笛」を吹くお爺さんがいたことである。

調べてみると、草笛吹きは横山祖道という禅僧で、昭和三十二年から五十五年まで、ここで毎日草笛を吹いていたとのことである。私たちが、この前ここに来たのは昭和五十四年の夏のことだったから、最晩年の演奏を聴いたことになる。観光客にとっては観光イベントの一つだったが、禅僧にとっては修行の一環だったようだ。今では、かつての演奏会場に置かれている装置のボタンを押すと、録音された草笛の音が流れてくるようになっていいる。

記念館は、平屋の簡素な造りだが、周囲の庭園も含め、とても清楚な佇まいだった。詩や小説の原稿、初版本、生前の愛用品などが展示されている、よくある普通の記念館で、一歩外へ出てしまうと、何があったのかよく覚えていないというのが実情だが、一つだけいつまでも記憶に残っている作品があった。それは、入って右手一番奥の壁に掛けられている藤村自身の揮毫による詩である。

人の世の若き生命のあさばらけ

学院の鐘は響きてわれひとの胸うつところ

白金の丘に根深く記念樹の立てるを見よや

雲白く遊子かなしむ・・・」であり、その次に思い浮かぶのは「まだ上げせめし前髪の 林檎のもとに見えしとき・・・」、もう一つあげるとすれば、「名も知らぬ遠き島より 流れ寄る椰子の実一つ・・・」なのである。

「千曲川旅情の歌」にはじめて接したのは、「遊子」の意味も知らない高校一年のときだった。「・・・旅人の群れはいくつか 畠中の道を急ぎぬ」の一節に接したときには、当時はまだ小諸にも千曲川にも行ったことはなかったが、ごく自然に、浅間の山裾を急ぐ旅人の姿を思い浮かべたものである。また、「初恋」は、藤村の詩としてというより、舟木一夫の歌唱を通して知ったものであるが、先の引用部に、「前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり」と続くのを読み、恋や愛と言わなくても、そうした思いが伝わってくるところに、詩人を感じたものである。「椰子の実」も同様である。実際には藤村は、その舞台とされる伊良湖崎には行ってはいないことだが、波に漂う椰子の実際のイメージが鮮やかで、そのメロディーとともに印象に残るのである。

校歌には、「学院の鐘」「白金の丘」「記念樹」と、具体的なイメージを想起させる用語もあるが、「道を開かむ・窮めむ・活きむ」と、若者を鼓舞する言葉が続き、「あへ行けたたかへ雄々しかれ/目さめよ起てよ畏るるなか

緑葉は香ひあふれて青年の思ひを伝ふ

心せよ学びの友よ新しき時代は待てり

もろともに遠く望みておのがじし道を開かむ

霄あらば霄を窮めむ壤あらば壤にも活きむ

あへ行けたたかへ雄々しかれ

目さめよ起てよ畏るるなかれ

なぜ、この詩が目にとまり改めてここに紹介するかというところ、この詩は、私が定年退職するまでの六年間勤めた明治学院大学の校歌だからである。在職中から、明治学院は若き藤村が学んだ学舎であり、後に卒業生・藤村によってその校歌が作詞されたことは知ってはいたが、まさか小諸でその校歌に巡りあうとは思ってはいなかった。

港区・白金にある大学の校歌に、遠く離れた信州・小諸でめぐり合えるというのも、一つの縁ということになるのだろうが、正直なところ、私はこの校歌、あまり気に入ってはいない。歌詞は、一応、新体詩らしく五七調の形をとってはいるものの、校歌という制約がそうさせるのか、卒業生だからということなのか、気合いが入りすぎてしまっているようで、今まで馴染んできた藤村の詩からは随分とかけ離れているように感じるのである。

藤村と言え、何よりもまず、「小諸なる古城のほとり

れ」と、何とも勇ましい言葉で締めくくられるのである。

母校への、そこで学ぶ若者への、激励の詩であることは理解できるが、一読者としては、藤村には別の詩情を期待してしまうのである。

明学に赴任し、校歌が藤村の作であることを知って以来、ずっとこうした思い・・・つまり藤村らしくないという思いを抱いて来たが・・・といっても、ずっと読み続けてきたわけではなく、一度読んで以後、繰り返し読む気にならなかったというのが正直なところだが、最近になって、私の思いがそれほどの外れではなかったということを知ったのである。

吉田精一著「日本近代詩鑑賞」（新潮文庫）は、「千曲川旅情の歌」を習った高校の授業で紹介され、その直後に明治編・大正編・昭和編の三冊を手に入れたのであった。しかし、そのうちの二冊を友人に貸してそのままになってしまい、手元には昭和編しか残っていなかった。そのことに気づき、もう一度手に入れようと思ったときには、文庫本は絶版になってしまったようで、古本屋に行ったときには、必ずと言っていいほど文庫本の棚に目を走らせてきたものだが、手に入れることは出来なかった。それが一年ほど前、偶々立ち寄った八王子の古本屋で、透明のフィルムに包まれた三冊セットを見つけたのである。その明治編の

冒頭を飾るのは藤村で、「秋風の歌」「千曲川旅情の歌」「椰子の実」の三作品が取り上げられているが、藤村について、こんな論評が載っている。

「藤村の詩は詩感の不統一と措辞（そじ・言葉の使い方）の彫琢不足により、冗長散漫の弊を免れないものが多く、当時の批評家から繊弱（せんじやく・弱々しい）にして朦朧というやうな評を受けた。純一な感情の思ひせまった高調は、一句もしくは一章に輝いているけれども、一篇としては形式の整った均斉美に乏しい傾きがあった。」

藤村と言えは我が国の新体詩運動の中心に位置する人物、超一流の詩人という風に理解しているので、素人としては、「詩感の不統一と措辞の彫琢不足」といった批評は思いつかないが、「冗長散漫」は、校歌については当てはまっているような気がするのである。

額に入った校歌を何度か繰り返して読み、白金への思いを新たに、記念館を出ようとしたとき、思いがけないものが目に留まった。

それは、出入り口の脇の小さな台の上に置かれていた家屋の模型である。模型は屋根が取り外され、家の中を俯瞰できるようにになっている。五く六部屋からなる田舎家の造りで、脇に置かれた案内には、小諸で藤村が住んでいた家の模型と書かれていた。館内に他に客がいなかったため、

になった。

「桜の実の熟するとき」は、こんな風に始まる。

日蔭に成った坂に添うて、岸本捨吉は品川の停車場手前から高輪へ通う抜け道を上がって行った。客を載せた一台の俵が坂の下の方から同じように上って来る氣勢がした。（5頁）

この俵に乗っていたのは、一時、捨吉と関係のあった繁子という女性である。五歳年上の女性ということ以外、二人の間柄の詳細は分からない。おそらく、プラトニックなもの、年齢から言って、捨吉が一方的に慕っていたものと思うが、その思いは既に断ち切られたか、断ち切られつつあるところである。

岡の上に捨吉が出た頃は最早繁子の俵は見えなかった。その道は一方で御殿山へ続き、一方は奥平の古い邸について迂回して高輪の通りに続いている。その広い邸内を自由に通り抜けて行くことも出来る。（8頁）

明学に赴任し、この界限を多少なりとも歩いたことがなければ、読み飛ばしてしまうところだが、自分も通ったこ

すぐ近くにいた受付の女性に確認すると、予想通り、佐久で見て来た藤村旧宅の模型であるという。前日に行って来たことを告げ、スマホに保存してあった写真を見てもらうと、彼女も行ったことがあるとのこと、「そうです。その家です。行って来られたのですか、苔の綺麗なお寺でしたでしょう」と、懐かしそうに相手をしてくれた。

### 白金・明治学院

手元にある藤村の「桜の実の熟するとき」（新潮文庫）は、明治学院に赴任して間もなく、大学の生協で買い求めたものである。この作品は、明学生及び明学職員の必読書といってもいい扱いを受けているようで、生協の書店で、他の本は「取り寄せ」のことはあっても、この本が書棚から姿を消すことはないように思えた。

この作品が書かれたのは大正時代に入ってからのことだが、描かれているのは明治二十年代、著者・藤村が明治学院に在学中のことで、藤村は岸本捨吉として登場する。明治二十年代といえ、文明開化の時代ではあるが、まだまだ江戸時代とのつながりが強い時代である。当時の地名、風俗習慣や登場人物について理解するには文庫本巻末の注が助けになったが、主人公の行動範囲をより具体的に理解するには、現代のものより古い地図（江戸切絵図）が頼り

とがある道ではないかと思うと、この坂がどこなのか、奥平の邸とはどこなのか、気になるのである。

「汽笛一斉新橋を・・・」は明治五年のことだったから、藤村の時代には品川駅はすでに開業していた。問題は、品川駅から高輪に通う「抜け道」がどこかということである。まず思いつくのは、現在の品川駅高輪口から国道一号线を渡って、品川グース（二〇二一年三月閉館）と品川プリンスの間を登って行く柘榴坂である。私自身、バスであるいは徒歩で何度となく通った道でもあり、高輪への道と言えはまずはこの道を思い浮かべるので、捨吉青年の辿っているのもこの道だろうと想像するものの、当時の品川駅は、現在の駅よりも少し南の八山橋寄りであったというから、作品の坂道は、品川プリンスの南側の路地あるいは、さらに南寄りの八山の坂（現在の環状六号線）ということもあるのかもしれない。しかしながら作品には、坂を登り切ったところで、一方は「御殿山」、一方は「高輪の通り」に続いているとあるので、やはりこの坂は柘榴坂とするのが自然だろう。

この坂を登り切った正面は、現在、ある宗教団体の教会となっているが、江戸切絵図では「奥平大膳太夫下屋敷」となっているから、「奥平の古い邸」というのはこのことに違いない。そこで直角に右折して道なりに行けば、や

がて高輪警察署前の交差点に出る。「高輪の通り」は、聖坂に続くこの二本榎木通りのことを言っているものと思われる。

高輪警察署前交差点は、現在では十字路だが、古い地図では丁字路になっていて、現在の桂坂に該当する通りは見当たらない。桂坂や高輪署は、その手前にある高野山東京別院の敷地を利用して作られたようだ。この高輪署前の十字路で左に折れて桜田通りを渡ったところが大学である。

古い地図によれば、現在大学のある所は九鬼長門守下屋敷、その北隣にある都ホテルは松平丹波守、西隣の八芳園は松平薩摩守の下屋敷など、この辺一帯に大名の下屋敷が密集し、さしずめ公務員団地ないしは各県の東京合同庁舎といった趣である。

捨吉は、普段は大学構内の寄宿舎で過ごし、長い休みになると、日本橋浜町にある兄の知人宅に身を寄せるといった生活を送っていた。そこまで大学からはおよそ二里あるとのことだが、当時の若者にとっては、二里は十分歩いて行ける距離だったようだ。

・・・よく捨吉は岡つづきの地勢に沿うて古い寺や墓地の沢山ある三光町寄りの谷合を迂回することもあり、

前から鑑橋を渡り、繁華な町中の道を日蔭町へと取って芝の公園へ出、赤羽橋へかかり、三田の通りを折れまがり、長い聖坂に添うて高輪台町へと登って行った。(中略)聖坂の上から学校までは、まだ可成あった。谷の地勢を成した町の坂を下り、古い寺の墓地について復た岡の間の道を上って行くと、あたりは最早陰鬱な緑につまれていた。寄宿舎の塔が見えて来た。高い窓を開けて日に乾してある布団も見えてきた。(51〜52頁)

また、別の日については、次のように記している。

・・・三田の通りの角から聖坂を上がらずに、あれから三光町へと取って、お寺や古い墓地の多い谷合の道を歩いた。清正公の前まで行くと、そこはもう同じ学校の制帽を冠って歩いている連中に逢った。(122頁)

日蔭町が新橋近辺、三光町が白金・白金台近辺のことだと分かれば、捨吉の足取りのおおよその見当はつく。「谷の地勢を成した町の坂」は、高台を通っている二本榎通りから桜田通りの方へ下る道筋、「墓地の多い谷合の道」は、桜田通りそのものを言っているものと思われる。現在では、道路際に並んだビルに視界が遮られ、桜田通りが谷合の道

あるいは高輪の通を真直ぐに聖坂へと取って、それから遠く下町の方にある家を指して下りて行く。その日は伊皿子坂の下で乗合馬車を待つ積りで・・・(中略)新橋で乗換えた乗合馬車は日本橋の小伝馬町まで捨吉を乗せて行った。(25〜26頁)

「三光町寄りの谷合を迂回する」というのは、大学から桜田通りを三田の方へ向かうということ、また、「高輪の通を真直ぐ」というのは、大学から桜田通りを渡って坂を上り、高輪警察署前交差点で左折して二本榎通りを伊皿子に向かうということを行っているものと思われる。どちらの道を行っても、新橋を経由して日本橋方面に向かうことになる。

この日は、伊皿子坂下(おそらく泉岳寺の近くと思われる)から新橋に出、そこで乗合馬車を乗り継いで日本橋小伝馬町へ向かったようだ。別の日には「新橋からは鉄道馬車に乗換えて行った」(99頁)とある。今なら、乗合馬車は乗合バス、鉄道馬車は路面電車ということになるのだろう。

日本橋からの帰途についてはこんな記述がある。

学校まで捨吉は何にも乗らず歩いた。人形町の水天宮

だったとは容易には想像できない。

在職中、地下鉄南北線の白金高輪駅近くにある港区役所の高輪支所が入っているビルを何度か利用したことがあったが、そのたびに、ここが斜面(崖と言った方が適切かもしれない)を利用した建物であることに気づかされたものである。桜田通り側の一階からエレベーターに乗って五階で降りると、そこは反対側の一階になっていたように記憶している。

先の引用の中に「清正公」とあった。明学に勤務してしばらくの間、私はこれを「キヨマサコウ」と読んでいた。私だけではなく、誰だっけそう読むだろう。だから、目黒駅の近くに住む知り合いのU氏が「セイショウコウの角を曲がればほぼ一本道で我が家の前まで来る・・・」と云うのを聞いて、ポカンとしてしまったことがあった。小説にも「セイショウコウ」とルビが振られているので、これが昔からの正式な読み方なのだろうと納得はしたが、何ともローカルな読み方だと思っただけだろうか。

在職中、しばしば、その「清正公」(覚林寺)の先まで散歩がてらに昼食を取りに出かけたものである。確かに、食事をしてこの辺りまで戻って来ると、明学生と思いき若者の姿をよく見かけた。藤村の時代との違いがあるとすれば、男子学生は誰も制帽を被ってはいなかったということ、

そして圧倒的に女子学生が多かったということである。

先に、「・・・捨吉は、普段は大学構内の寄宿舎で過ごし・・・」と記した。また先の引用の中には、「寄宿舎の塔が見えてきた」とあった。この寄宿舎を理解するにあたっては、私の在職中に配られた「明治学院百五十年史」が役に立った。

この「百五十年史」には、明治二十年代の大学構内のジオラマ写真や在りし日の寄宿舎の写真が掲載されている。それらによれば、寄宿舎は、現在の正門から入って一番奥（後に大学が北側の土地を買収して大学の敷地を広げたとすれば、もう少し手前ということになる）、大学の本館やヴォーリス広場の先、生協の食堂やホールなどが入っている多目的な建物のある辺りにあったように見える。

寄宿舎の建物は、中央部が丸く湾曲して前面に突き出た、左右対称のモダンな木造四階建てで、「百五十年史」には「東京随一の木造建物」と紹介されている。屋根の中央部には檜（塔）があつて、その部分は五階建になっているようだ。これなら捨吉青年が言うように、かなり遠くからでもよく見えたことだろう。

「桜の実・・・」の中では、その名称にまでは言及されていないが、この寄宿舎は、大学創設者に因んで、ヘボン

その窓の外にあつた。(94頁)

この赤煉瓦の図書館は、現在の正門を入って、緩い坂を上った右側にある記念館である。寄宿舎の窓は南を、この図書館の窓は西を向いているので、「方角の違った学校の構内のさま」というのはその通りである。

この記念館と隣の洋館（インブリー館＝重要文化財）は、現在よりももう少し桜田通り寄りにあつたが、道路拡幅に伴って現在の位置に曳家されたとのことである。大学構内については、こんな記述もある。

・・・向こうの一角に第一期の卒業生の記念樹があれば是方の一角にも第二期の卒業生の記念樹が植えてあるという風に、ある組織的な意匠から割出されてある。三棟並んだ亜米利加人の教師の住宅、植民地風の西洋館、それと相對した位置に講堂の建物と周囲の墓地とがある（中略）多数の聴講者を容れるチャペルは階上にあつて・・・（53頁）

小諸の記念館にあつた校歌に「記念樹」の一語があるのが気になったが、この記念樹が今でも残されているのか確かめることはできなかった。周囲の墓地というのも、心当

館と名付けられていたが、このヘボン館は明治四十四年、原因不明の火災により焼失している。「百五十年史」には、建物全体に火が回り、焼け落ちる寸前のヘボン館の写真が載っている。不思議に思うのは、多少の時差はあるものの、ヘボン館が焼け落ちたのと同じ九月二一日に、米国に帰国していたヘボン博士が逝去されたということである。ところで、藤村の時代は、ヘボン館と言えど寄宿舎だったが、現在のヘボン館は、ほとんどの教員の研究室が入っている、地下二階、地上十一階建ての高層の建物である。在職中の私の研究室も、このヘボン館の六階にあつた。

捨吉青年は、友人と語りながら寄宿舎の窓から外を眺めるのを好んでいたが、もう一つ気に入っていた窓があつた。

・・・新しく校内にできた赤煉瓦の建物は、一部は神学部の教室で、一部は学校の図書館に成っていた。まだペンキの香のする階段を上がつて行って二階の部屋へ出ると、そこに沢山並べた書架がある。（中略）書架で囲われた明るい窓のところには小さな机が置いてある。そこへも捨吉は好きな書籍を借りて行って腰掛けた。

寄宿舎から見るとは方角の違った学校の構内のさまが

たりはない。「三棟並んだ住宅」は現存しないが（一棟のみ、東村山の高校に移築され、今でも使われているとのことである）、ジオラマ写真に納まっているので、その位置関係はよく分かる。この三棟があつたのは、現在の明治学院高校の校舎がある辺りと思われる。

この構内描写の中でどうしても気になるのは「チャペル」である。現在、明治学院のチャペルと言えば、ヴォーリス建築としてつとに有名だが、藤村の時代にはまだヴォーリスのチャペルはなかった。先の引用によれば、チャペルは講堂の階上にあり、その講堂は三棟並んだ教師住宅と「相對した位置に」あつたとのことである。確かに、ジオラマのその位置には、全体的には二階建てで、中央部のみ三階建てになったサンダム館なる建物が配されている。

調べてみると、この建物には教室が集められ、当時の授業は主にここで行われていたようだ。二階には四百名も収容できる講堂があり、礼拝はそこで行われていた。中央の三階部分についての説明はないが、おそらく鐘楼になっていたのではなからうか。当時のサンダム館は、現在のチャペルのある辺りにあつたという。残念ながらこの建物も、一九一四年（大正三年）、二階部分からの出火により全焼してしまふ。寄宿舎の焼失からわずか三年後のことである。



その後、新サンダム館と新チャペルの設計・建設が、ヴォーリズの手任せられ、一九一六年（大正五年）、新チャペルは今あるところに、新サンダム館は現在のへボン館のあるあたりに建てられたが、新サンダム館は現へボン館の建設にあたって取り壊されたとのことである。

### ヴォーリズ

軽井沢の睡鳩荘に掲げられていた、朝吹登水子の一文「父は（中略）ヴォーリズ氏に高輪の洋館を依頼した。この洋館は現在も高輪東芝倶楽部として残っている・・・」が気になっていた。

明治学院に在職していた頃、時々品川駅から大学まで歩くことがあったとは先に述べた通りである。捨吉青年のように（？）石榴坂を使うこともあったが、国道一号线を三田方面にしばらく進んで、高輪ゲートウェイ駅（当時はまだ開業していなかった）の手前で左折して桂坂経由で桜田通りに入る道を選ぶことが多かった。なかでも、桂坂に入る手前で東禅寺に向かい、突き当たった所で狭い路地に入り、洞坂経由で桂坂へ出るルートが面白いと思っていた。面白いとは言っても、実際に歩いたのは二、三度、道幅は狭く、車の通り抜けは出来ないという表示が出ていたように思う。そこに探している建物があるはずだが、という思

いがあれば別だが、洞坂は狭い上にかんまりの急勾配ということもあり、視線を上げ、周囲を見渡しながら歩くというのはかなり不自然な姿勢と言わざるを得ない。

洞坂が桂坂に入る手前の右側に大きな屋敷があったことには気づいていた。桂坂に面して門が開いていて、奥に白い建物が見えていたことも覚えている。しかしながら、それがヴォーリズの手になる朝吹邸とは知らなかった。

ネットを調べてみると、洋館マニアなのかヴォーリズファンなのか、塀越しにあるいは木の間隠れに、朝吹邸を撮った写真が何枚もアップされている。この建物もオール・デコ様式になるのだろうか、全体的にはシンプルな印象を与えるが、白亜の外壁に加え、上部に曲線を使った丸枠窓が優美である。睡鳩亭の二階の部屋を飾っていたのも同じ造りの窓だった。

こうした写真と、なによりも登水子の文章に誘われて、改めて高輪を歩いてみようと思ったのである。

洞坂に入ってすぐの所で見上げると、確かに白亜の洋館が聳えているのが目に入って来た。建物は、崖の縁に立てられているような感じである。坂の途中で、宅配のお兄さんとすれ違ったが、やはりここは車の進入は出来ず、徒歩での配達のみだった。

狭い急坂を上り、塀に沿って行くと、庭木越しに白い建

物が見えて来る。こんな所にヴォーリズ建築があったとは

・・・相変わらず、門は大きく開かれているが、公に開放している施設ではないので、中に入ることははばかられる。

洞坂から桂坂に出て左折し、坂を登り切った所が高輪警察署前交差点である。個人的には、この交差点は、高輪警察署前交差点ではなく、その向かいにある消防署の名前をとって、「二本榎出張所前交差点」とすべきではないかと思っている。なぜなら、二本榎は、江戸古地図にも載っている名称であり、しかもここに聳える塔（望楼）は、かつては火の見櫓として使われていたもので、都の歴史的建造物に指定されている記念すべき建物だからである。

はじめてこの建物を見たとき、どこか懐かしい印象を持ったのは、この塔が昭和初期の古い建物だということもあるが、昔夢中になった、少年探偵団が活躍する映画で、よく似た建物を見たように思ったからでもある。あれは何の映画だったろう、櫓ということから「鉄塔の怪人」を連想したが・・・おっと、話が脱線してしまった。昔は、つまり、捨吉青年の時代には、この交差点に立てば、目の前に学舎を眺めることができたのではないだろうか。今では、大きなマンションに遮られ、それは叶わない。この「二本榎出張所前交差点」から坂を下って桜田通りを渡ったところが大学である。

大学正門に入って緩い坂道を上って行く途中の銀杏の下で、近隣のアマチュア画家と思われる人たちが絵筆をとっている光景をよく目にしたものである。彼らの視線の先にあるのは、赤煉瓦の外壁に大きな緑青の三角屋根とその先に尖塔を持つチャペルと現在では記念館と呼ばれている赤煉瓦の洋館である。この洋館は、「図書館」として「桜の実・・・」にも登場するが、チャペルの方は大正になってからの建物なので、小説には登場しない。「校歌」の中に、「学院の鐘は響きて・・・」とあるので、ひよつとして校歌には間に合ったのでは？と思っただけ、校歌は明治四十年に制定されているので、「鐘」はこのチャペルから響いてきたものではない。鐘自体も、おそらく旧チャペルの焼失とともに使えなくなってしまったのではなからうか。

チャペルの脇に、この建物に関する説明が掲示されていて、そこに設計者ヴォーリズの名前もあるが、はじめて読んだときには、ヴォーリズがどういう人物なのか全く知らなかった。

ヴォーリズの名前を意識するようになったのは、赴任後しばらくしてからで、彼の設計した建物を紹介するテレビ番組を見てからのことである。ただし、そこで紹介された建物の中に、明学のチャペルが入っていたのかどうかはっ

きりしない。覚えているのは、彼は建築を専門に学んできた人ではなく、元々は高校の英語教師として来日し（本業はキリスト教の宣教ではなかったか？）、後に実業家に転じて、メンソレータムでお馴染みの近江兄弟社を設立したということくらいである。近江兄弟社の設立と相前後して、設計事務所も立ち上げたということだが、戦後の日本においては、メンソレータムは赤チンと並んで家庭の常備薬であり、建物より薬物の方が、「近江兄弟社」という風変わりな社名とともに、私には馴染み深いものであった。

偶然にも、このテレビ番組を観た直ぐ後で関西に行く用事ができたので、滋賀・近江八幡に寄ってヴォーリス旧宅の訪問を試みたのだが、入館には予約が必要ということで、板塀越しに木造二階建ての外観を見ただけで戻って来て、それ以来、近江八幡に行く機会はない。

テレビで紹介されていたのは関西にある大学やデパート、それにヴォーリス自身の住宅などで、どれも百年以上も前のものとは思われないモダンな造りというか、ヴォーリス好みとでも言ったらいいのか、独特の統一感を持っているように思われた。もちろん、それは一言で言えば「レトロな洋館」ということになるが、どこかで我が国の古民家を連想させるような佇まいが面白いと思う。

勤務している大学のチャペルが、このヴォーリスの設計

によるものであることを知ったのは、このテレビを見てからのことである。ただし、ヴォーリスの名前は、チャペルの設計者としてではなく、大学の奥にある中庭が「ヴォーリス広場」と名づけられているので知ったのが先だったような気がする。

このチャペルでは、現在もときどき、結婚式が執り行われ、その前で記念写真の撮影をしているのに出くわすことがある。日本人女性と結婚したヴォーリス自身、自分で設計したこのチャペルで式を挙げている。大正八年のことであつた。

#### 参考文献

- 桜の實の熟するとき 島崎藤村 新潮文庫  
切絵図・現代図で歩く もち歩き江戸東京散歩 人文社  
明治学院百五十年史  
日本近代詩鑑賞 明治篇 吉田精一 新潮文庫